

第2回世界自然遺産5地域会議 開催結果概要

■開催概要

日 時：令和6年1月17日（水）15:00～17:45

（世界遺産登録30周年記念「世界遺産特別講演会」終了後）

場 所：京都ガーデンパレス 2F「鞍馬」／リモート会議併用

出席者：＜5地域会議構成員＞

世界自然遺産5地域会議（以下「5地域会議」という）会員24名（当日新規加入の弘前市長を含む17市町村長、代理5名、2公益財団法人理事長）〔うち19名（代理2）が対面、5名（代理3）がリモート参加。欠席は1名〕（別紙参照）

＜関係行政機関・支援機関＞

則久雅司環境省自然環境局自然環境計画課長、中山直樹鹿児島県環境林務部自然保護課長、中村利雄イベント学会会長、蔵元進地球産業文化研究所専務理事〔対面〕

＜学術顧問＞

岩槻邦男東京大学名誉教授〔対面〕

＜特別講演会講師＞

山極壽一総合地球環境学研究所長〔対面〕（後掲の注記参照）

※その他屋久島環境文化財団役員、随行者、事務局等を含め、合計約80名が参加。

■議事概要

（0）開会

- ・佐々木文明秋田県藤里町長（環白神エコツーリズム推進協議会会長）が本会幹事を代表して開会のあいさつ。
- ・本会規約第8条により、小野寺浩本会代表（屋久島環境文化財団理事長）が議長に就任し、以下の議事を進行。

（1）新規会員入会について

- ・事務局より、青森県弘前市からの5地域会議加入申込書を受理したこと、同市入会については幹事の賛同も得られていることを報告。
- ・リモート参加者を含め異議はなく、全会一致で弘前市の入会を承認した。
- ・櫻田宏弘前市長が本会入会に当たってのあいさつ。
- ・小野寺議長は、企業などの新規会員の受入れについて、協賛金や会費の事務処理、税制上の課題を整理した上で前向きに進めていきたいと発言。

（2）大阪・関西万博への参加について

- ・中村利雄イベント学会会長が大阪・関西万博への参加について、概略、以下の説明を行った。
 - *2005年愛・地球博の理念を継承発展させていくため、イベント学会と地球産業文化研究所（GISPRI）は、大阪・関西万博の「共創パートナー」に登録。「関西の歴史と文化」「水と流域」「世界自然遺産」の3テーマで「共創チャレンジ」プロジェクトを立ち上げ、サポートしている。
 - *万博期間中、博覧会協会による「テーマウィーク」の「未来への文化創造」ウィークに参加し、5月6日、3プロジェクト合同での成果発表を行う。
 - *万博出展機会について、2025年5月6日は会場内の「スタジオ」使用で決定だが、170㎡100人規模で、1日を3グループで分け合う。

- *これ以外に「一般参加催事」での参加という枠組があることが分かり、5地域会議として EXPO ホール（大催事場）利用の企画提案書を提出し登録した。ホールには円形ステージ（直径 18m）があり約 2,000 席規模。ただしこの採否は、本年 4 月以降に確定する。
- *提案の内容は、5 地域がそれぞれ持っている大型自然映像を上映しそれを縁りの深い著名な有識者が解説することを中心に、各地域の物産展示、郷土芸能上演などのほか、シンポジウムなどを行うというもの。詳細は 4 月以降に詰め、調整していくことになる。
- ・中村会長との質疑応答を通じ、以下のような確認及び意見交換が行われた。
 - *5 地域会議の運営経費は、GISPRI が愛・地球博の基金から支援しており、万博出展に当たっても会場使用料までは負担できる。各地域からの出しものなどにかかる経費は、各地域で負担してほしい。
 - *民間企業との連携は重要。万博でも、海外のメディアと連携した情報発信なども考えたい。
 - *世界自然遺産の保全に 100 万円単位でも拠出したい民間人は、自分を含め多数いるはず。使用目的と会計処理方法をはっきりさせ、寄付金を受け入れる仕組みを作してほしい。
 - *万博では、会場だけでなく各地域を結んで地元からも参加し、世界自然遺産をアピールすることも考えたい。
 - *国際シンポジウムを開き、日本の自然と文化に関心のある海外の有識者に参加してもらうことも考えられる。
 - *日本ならではのやり方で遺産地域の管理を進めていこうとするなら、国民の意識を変えていく必要がある。万博は絶好のチャンスなので、マスコミにも呼びかけ、5 地域会議として国民運動的に機運を高めていけるとよい。
- ・議長まとめ：

行政の仕組みや国民意識を変えること、また政府への政策提言、自然保護への新しい提案、民間含め資金確保をすることなどは、5 地域会議を設立した目的そのものにかかわるテーマだ。大義名分はあるのだから、万博も活用しながら、どう具体的なものに結び付けていくか、検討を進めたい。

万博について、提案はしたが具体化に向け何をするか、どう動くかは決まっていない。5 地域会議会員の熱意、意欲次第である。これから相談しながら詰めていきたい。

（３）事例報告について

- ・事務局から事例収集の趣旨と事例集作成の経緯等について説明したあと、議長が 5 地域会議による政策提言など活用方法に合わせて今後とも事例の分析を深める必要があると指摘。
- ・そのあと、以下 5 件の報告が行われた。
 - *北海道（公財）知床財団事業部 秋葉圭太参事：「知床五湖地区における利用調整地区制度の導入と運用」
 - *秋田県藤里町商工観光課 佐々木吉昭係長「藤里の聞き書き～自然と共に生きる想いを伝えるために～」
 - *東京都小笠原村環境課 井上直美主査「ペット条例（小笠原村愛玩動物の適正な飼養及び管理に関する条例）」
 - *鹿児島県大和村 伊集院幼村長「アマミノクロウサギ研究飼養施設（仮称）の整備」
 - *沖縄県国頭村環境保全課 平良政幸課長補佐「『世界自然遺産推進共同企業体』と連携した保護地域管理」
- ・岩槻邦男氏（5 地域会議学術顧問）コメント：

日本の世界自然遺産管理の実践を通じて、地球の自然をよくしていくことに、5 地域が共同

体として取り組んでいくことを期待している。日本的な保護の考え方を一体となって世界に向け発信していただきたい。また、日本の各地域の文化の多様性は自然の多様性が作り出したものであることを踏まえ、自然遺産と文化遺産の交流をもっと進めていただきたい。

(4) 意見交換

- ・ 時間的制約から、以下の2名に意見を求めた。
- ・ 則久雅司環境省自然環境計画課長：日本型自然保護のもとになっている自然観の西洋との違い、また、日本の保護制度は調整型の独特な地域制の仕組みであり、地方行政を始め地域に支えられていることを、これまでの行政経験から実感している。暮らしの中で自然を守る日本のやり方は、地域社会のサステナビリティが自然を支える上で重要と考える世界の環境行政のトレンドの一つにも合っている。環境省としては世界遺産などの保護施策を見直し、新しい柱を立てていくべき時期。当会議と連携して進めていきたい。
- ・ 山極壽一所長（特別講演講師）：世界自然遺産は、みな日本の辺境に位置している。日本という国は辺境を取り込みながら文化の厚みを作ってきた。日本文化を支え、幅を広げる役割を果たしてきた自然について、これから何ができるか5地域と共に考えていきたい。
- ・ 議長とりまとめ：万博参加は、相談しながら進めていく。事例集は、先進的モデルであり、政府への政策提言、新しい保護事業の提案のヒントにもなる重要な素材である。整理、分析を進めたい。自然遺産と文化遺産の交流については、2自然遺産、1文化遺産のある鹿児島県を一例に検討することも考えられる。

(5) 閉会

- ・ 以上をもって第2回5地域会議を閉会することとし、2名の幹事が閉会のあいさつを述べた。
- ・ 渋谷正昭東京都小笠原村長：取り組みにおける人の重要性を強調したあいさつに加え、都道府県の5地域会議加入働きかけを提案。
- ・ 知花靖沖縄県国頭村長：各地域が連携して万博に参加することを訴え、自然保護と暮らし、地域活性化との両立という課題に連携して取り組んでいこうと締めくくった。

<注記>特別講演会の開催

講師 山極壽一 総合地球環境学研究所長（京都大学名誉教授）

演題 「世界自然遺産がもたらした新しい価値とこれからの未来」

講演テーマ概要

- ・ 5地域会議が掲げる「日本型自然保護」とは、日本的自然観に基づく共生と循環の考え方。西洋近代の二元論や排中律のパラダイムが行き詰まるなかで、世界からも注目され始めている。
- ・ 私の研究フィールドであった屋久島とアフリカのヴィルンガ、カフジは、いずれも世界自然遺産。ゴリラの研究と保護に不可欠な地元との信頼関係の構築には、屋久島での経験が役だった。
- ・ カフジと屋久島の自然観には、自然は管理すべきものという西洋的自然観ではなく、共存すべきものという共通性がある。
- ・ 東洋の知と西洋の知を融合させ、文化と科学が共鳴し合う新たな環境倫理を作ることが重要。そのモデルが世界自然遺産と言えるのではないか。